# 二〇二〇年の日本口承文芸学会

日本口承文芸学会会長　立石　展大

日本社会全てが、新型コロナウイルス対策に追われる中で、本学会も対応を求められた一年でした。本学会の活動は、年二回の研究例会開催と会報発行、そして年一回の大会開催と機関誌発行です。特に人の移動を伴う研究例会と大会は、日々変化する感染状況と一般社会の対応を鑑みながら、どのように開催するかを検討してきました。結果、二〇二〇年三月の研究例会は中止、六月の大会は八月に延期してウェブに発表原稿と資料をあげるオンライン開催、十一月の研究例会はｚｏｏｍを使用したテレビ会議方式で同期型のオンライン開催となりました。三月の研究例会は、新型コロナウイルスの急な感染拡大と社会的な自粛要請に対応するのに、開催方法を変更する時間的余裕がなく、中止せざるを得ませんでした。その後の大会と研究例会は、どのように開催するか各委員会と検討を重ねました。会長として助かったのは、各委員会委員長が中止ではなくどのように実施するかという姿勢で取り組んでくれたことです。

大会の開催も、特に若手研究者の発表の場を確保するため中止にはしないという思いを大会委員会と共有できました。また、本学会会員であり、学会ホームページ管理のサポートを長年担ってくださっている佐藤皇太郎氏の存在も非常に助かりました。初めてのオンライン開催に向けた技術的な準備の全てを引き受けてくださったのは本当に心強かったです。学会の人材の豊富さを再確認した年でもありました。これら開催に向けた経緯の詳細は、間宮史子大会委員長からの報告をお読みください。各大会委員が、他学会の情報も持ち寄って、本学会の規模に即したオンライン大会を組み上げてくださいました。その間、大会を中止しようという言は一切なく、現状の中でどうすればもっとも円滑に大会を開けるかという建設的なやり取りが交わされました。非常時において柔軟に対応した大会委員会は、会長としては、まさに地獄に仏でした。

この大会準備と並行して、機関誌編集の準備も進んでいました。根岸英之機関誌委員長からは、五月早々に新型コロナウイルス特集の企画が出されて会員への執筆募集が行われ、本誌の特集へと繋がりました。現在の社会的課題に対して、口承文芸の立場から学問的に取り組むフットワークの良さが発揮され、この時期に根岸氏が機関誌委員長を務めてくださっていたことは、誠に幸いでした。そして、この特集を組むにあたり、『伝え』を編集している佐藤優会報委員長を始めとした会報委員会も

歩調を合わせてくださり、『伝え』においても「コロナ禍の中の口承文芸研究」のコーナーが設けられました。十一月に発行された『伝え』第六七号では、愛知県の枝下用水資料室や日本民話の会、および市川民話の会の活動の様子が紹介されました。

オンライン大会が無事に終了した八月以降、十一月の研究例会の開催について、例会委員会との検討が本格的に進みました。結果、ｚｏｏｍを利用した開催方法になりましたが、今思えば、日本社会全体が四月から徐々にインターネットを利用した同期型の会議に慣れてきた動きに即していました。特に、研究例会はシンポジウム形式で行われるため、ｚｏｏｍの利用がもっとも適していました。二〇二〇年三月には中止にせざるを得なかった研究例会でしたが、十一月は開催するとの方針を中村とも子例会委員長との間で確認できました。そして中村氏が委員会内での意見の集約や発表者との調整を一手に引き受けてくださり、十一月初めの関係者によるリハーサルを経て、十一月二十八日に第七八回研究例会を開催できました。第七八回のテーマは「中近東・韓国・日本における子どもに手渡す物語」で、本来であれば三月に開催されていたはずでした。中近東を片桐早織氏、韓国を大竹聖美氏、日本を大島廣志氏が、それぞれ担当くださり、豊富な資料提示とともに、各国・地域の昔話絵本を中心に解説をいただきました。この例会の参加者は三十三名で、人数から見れば、これまでの研究例会とほぼ同じでしたが、会員外で関西からの参加者もあったことは、オンライン開催の意義があったといえるでしょう。一方で、インターネットに不慣れな会員や、そもそもインターネット環境がない会員を置き去りにしてしまったことは今後の課題です。こうした会員に配慮するためにも、事前に発表資料を各会員へ郵送して、ＦＡＸや郵送で質問受け付けもしましたが、これに対する反応はありませんでした。

このように、これまでにない対応を強いられた一年でしたが、活動としては、各委員会委員長がリーダーシップを発揮してくださったお蔭で、学会の社会的役割を果たせてきたといえます。また、学会活動に携わってくださった各会員にも感謝でした。研究発表のみとなった二〇二〇年度大会では十名の発表が行われました。発表原稿と発表資料をインターネット上にあげて、二週間にわたり書き込まれる質問に対して回答するという、発表者にとっては、大変手間がかかる開催方法でしたが、それでも例年並みの発表者数でした。コロナ禍で図書館の利用も制限され、フィールドワークもできないような状況でも、研究発表に臨んでくださった姿勢は、同じ研究者として勇気づけられました。例年ですと十名の発表は二会場に分かれ、全員の発表を聞くことはできませんが、今年は全員の発表を読めたというのは利点でした。また「初めてのオンライン開催を決めたの



に、発表者がいなかったら寂しい」とも個人的に危惧していたのが、杞憂となったことで安堵しました。

ｚｏｏｍでの研究例会にしても、これが最初のｚｏｏｍ利用だった委員もいらっしゃる中での開催でした。慣れない開催方式でも、快く対応くださいましたが、心理的なご負担は大きかったことと思います。二〇二一年三月の研究例会も、ｚｏｏｍ利用のため、発表者に同様の負担をかけてしまいました。

ｚｏｏｍは発表者との質疑応答ができる点で、確かにシンポジウム形式の研究例会に向いたツールです。パソコンなどの機器とインターネット環境さえ整っていれば、国内外を問わずどこからの参加も容易なのは大きな長所です。しかし、会員の中には物足りなさを感じる方も多かったことでしょう。対面式で集まって開催する場合、従来であれば、発表外の時間に情報交換をしたり、研究成果を抜き刷りなどで渡すこともできました。発表を通じて、他の学会員との面識を得る貴重な機会でもありました。しかし、こうした個人間の「おしゃべり」は、オンラインでは難しかったです。まさに、授業はオンラインで受けられてもキャンパスライフができないことでストレスを溜める大学生と同じです。オンライン開催の大会では、交流の場として、近況を書き込めるコーナーを設けましたが、書き込みの数は少なく、機能したとは言いにくい状況でした。あらためて、人間というのは対面で絆を結んでいく社会的な生物であったことを実感させられました。相手に向けて語ることで成り立つ口承文芸が、語りとともに、語り手と聞き手の関係を結ぶものであることを再認識しています。

まだ一年なので我慢はできますが、交流の場としての役割は果たせませんでした。既に面識がある者同士でしたら画面越しでも問題ないですし、無事を確認できるので良かったでしょうが、新入会員ほど学会の雰囲気を感じられないことだったと思います。アフターコロナの学会において、もしオンライン開催を取り入れていくなら、まずはこの点に配慮していかなければなりません。

事務局を預かる立場としては、事務処理がままならないことで、ご迷惑をかけてしまったことも反省点でした。事務局を置いている研究室への入室が、緊急事態宣言が発令されたことで制限をかけられてしまい、例年どおりの時期に機関誌や案内の発送ができなくなりました。機関誌発送作業も研究室では不可能になったため、出版社の好意に甘えるかたちで、オリオン出版に伺って発送作業を行いました。さらには、発送作業までオリオン出版の方にお手伝いいただいてしまい、感謝しきりでした。会員各位にも、こんな時期だからとご容赦いただいたことが多かったと思います。ご理解とご協力を、誠にありがとうございました。

（たていし・のぶあつ／高千穂大学）

二〇一九年、中国を発生源と考えられる新型コロナウイルス（COVID-19）が世界的に流行し、日本においても、二〇二〇年から生活の在りようが大きく変化した。

その影響は日本口承文芸学会も無縁ではなく、二〇二〇年三月の研究例会は延期、六月の大会はウェブ大会として八月に研究発表のみを行う形となった。

機関誌委員会ではこうした状況に鑑みて、以下のとおり「緊急特集」を組み、投稿原稿を広く公募することとした。

＊　＊　＊

『口承文芸研究』第44号緊急特集への投稿公募について

この状況下において、会員の皆さんが耳目した事象や直面した出来事、研究者・語り手・学会員として考えることなど、ぜひ多くの方にご寄稿いただければありがたいです。

公募テーマ：緊急特集　新型コロナウイルス流行の下で（仮）

例　コロナ流行下で耳目したウワサ・ハナシなど
（国内・海外問わず）
各フィールドにおける疫病をめぐる伝承など
コロナ流行下で直面した出来事
（研究・調査環境、伝承環境の変化）など
口承文芸研究や学会のあり方について
（対面からインターネットを介した
コミュニケーションへの変化
こうした状況に学会としてどのように
対応していけばいいか）など

## 緊急特集「新型コロナウイルス流行と口承文芸研究」に当たって

＊　＊　＊

結果、日本国内のアマビエ論をはじめとする二〇二〇年のリアルな事例報告、アイヌ、台湾、韓国、ロシア、イギリスを含む疫病などにまつわる論考と、九本の多彩な投稿を寄せていただけた。公募の形を採ったのは、かつての民俗学において、雑誌を介して新しいテーマを寄せ合ったことを意図してのものである。大会発表の内藤造亨論文も、本特集とつながるものと言えるだろう。

併せて、学会としてどう対応したかを記録に遺すことも意義があると思い、会長はじめ、大会委員会、例会委員会、会報委員会の立場からの文章を寄せていただいた。さまざまな思いを抱いて、学会運営に当たってくださっていることが知れる。

口承文芸は、取り立てて、対面による「語る／話す／歌う」―「聴く」という関係性において成り立つ領域である。新型コロナウイルスは、こうした基本的なコミュニケーションの在りようを、大きく変容させるものとなった。ＳＮＳやオンラインといったコミュニケーション手段が発展し、情報伝達の方法や、それに伴う身体の在り方も、変わらざるを得なくなった。口承文芸という観点でこのような問題を思考・発信していくことは、重要な社会的意義があると考える。

本特集が、今後の何らかの羅針盤の役目を果たすことを希って止まない。

機関誌委員長　根岸英之（ねぎし・ひでゆき）



【緊急特集 新型コロナウイルス流行と口承文芸研究】

## 感染症流行下で開催された初のウェブ大会

間宮　史子（大会委員長）

二〇二〇年度の第四十四回大会は、新型コロナウイルス感染拡大の影響で、ウェブ大会という異例の開催となった。以下、本学会初のウェブ大会の顛末を記す。

今大会は本来、六月六日・七日に東京都の高千穂大学で開催される予定で、大会委員会（加藤耕義・熊野谷葉子・間宮史子）は準備を進めた。公開講演およびシンポジウムのテーマは「神話と昔話―女性神をめぐって―」、講演者は三浦佑之氏と渡邉浩司氏、シンポジウムのパネリストは沖田瑞穂氏、北原モコットゥナシ氏、坂井弘紀氏ということに決まる。二月初めに研究発表募集を通知し、三月の運営理事会で応募研究発表の採否を決定するはずだったが、三月十四日の第七十八回研究例会の実施が見送られたのに伴い、運営理事会はメール審議で行われた。メール審議による審査結果を受けて、研究発表会のプログラムを組み、十三名の発表者に連絡したのは三月末。連絡メール末尾には、「今後の新型コロナウイルスの状況がどうなるかわかりませんが、大会委員会と大会会場校は、現時点では、第四十四回大会を無事に開催できるよう祈りつつ準備を進めております」と記した。この時点で、今後の状況次第では大会参加が難しくなるかもしれないという発表者もおり、大会開催について、大会会場校の立石展大会長と相談したうえで、然るべき時期に判断しなければならないと考えた。

四月初め、日本独文学会の情報が寄せられる。独文学会は、本学会と同じ六月六日・七日に予定している春季研究発表会の開催中止を検討しているようだとのこと。私たちも開催についての方針を早急に決定するべきだと大会委員間でやりとりするうち、四月七日、七都府県に緊急事態宣言が出された。緊急事態宣言を受けて、まず立石氏と次のことを相談する。

一　六月の大会開催は断念する。今年度中の延期は日程上困難と思われるので、講演とシンポジウムは来年度の大会で行う。

二　一方、若い研究発表者の発表機会を確保するべきである。その場合、

A　研究発表者に機関誌への投稿を勧める。／B　研究発表の場を秋にでも別日程で設ける。／C　研究発表の場をネット上に設ける。

大会委員会としても、一については、登壇者の承諾を得たうえでその通りにしたい、講演とシンポジウムは、その場で多くの人に聴いてもらうことが大事だ、と考えた。

二についてはどうするか。B案は秋の学会シーズンと重なり難しいと思われるため、機関誌への投稿を勧めるA案がよいのでは、と考えたのだが、投稿が不採用となると、発表の場は失